

一歴史家の見た御伽草子『猫のさうし』と禁制

上 田 穰

1. 高田・三雲家文書にみられる禁制について
2. 三雲家文書の中の禁制
3. 前田玄以と西洞院時慶と御牧勘兵衛景則
4. 中世小説『猫のさうし』と『時慶記』の禁制の理解度

室町期の御伽草子『猫のさうし』（中世小説）は市古貞次氏の分類によれば、異類物、論争物として扱われているが⁽¹⁾、この草子は冒頭において慶長7年(1602)8月中旬に京洛に猫の綱を解き放つことを命ずる禁制が出され、町奉行所から一条通りの辻に高札が立てられたことによっている。その内容は「一、洛中猫の綱を解き、放ち飼ひにすべき事、一、同猫売買停止の事」というのであり、「此の旨に相背くにおいては、堅く罪科に処せらるべきもの也」という禁令を基にして始まる。既に、この禁令について、市古氏は『(西洞院)時慶卿記』の慶長7年10月4日の条に「猫繫グベカラザル旨、3ヶ月以前ヨリ相触レラル」とあることを指摘されている⁽²⁾。このことから、この御伽草子は非常に正確な記述を根拠にこの草子を展開させていることに注目されている。だから、この草子の成立期を誰もが近世前期の慶長7年(1602)8月以降の成立であることを疑わない⁽³⁾。本論で私は『三雲家文書』をもとにして2、3の問題点を検討してみたいと思う。

1. 高田・三雲家文書にみられる禁制について

私が『三雲家文書』について紹介したのは大阪市立博物館『研究紀要』第4(昭和47年3月)においてである⁽⁴⁾。主要文書は31通ある。その中で禁制は6通ある。その前に、この三雲家について簡単に説明しておかねばならない。がんらい、三雲家は京都聚楽堀川通り河西惣町中の頭取組頭をする家柄であり、その名を三雲九左衛門という。また、三雲家文書は文禄4年(1595)8月の聚楽第破却以前と以後のものに二分することができるのである⁽⁵⁾。この前期のものには、この三雲九左衛門関係のもの5通と、伏見深草枯木町住の郷土兼大庄屋であった高田忠兵衛関係のもの9通とが含まれている。ところで、聚楽第のことであるが、天正11年(1583)9月に京都二条の妙顕寺跡に着工され、翌年に完成している。そして、同15年(1587)9月には、これを更に大幅に修築して当時市中にあって、さながら城郭の様な景観を呈していた。この意味で聚楽堀川通り河西惣町中はその城下町の役割を果たしていた。例えば文禄元年(1592)秀吉は朝鮮征伐に自ら九州の名護屋に出向いているが、その後、三雲九左衛門は京都町奉行の前田玄以(1540-1602)の指示に従い聚楽堀川通河西惣町中を代表して名護屋まで赴き陣中見舞いに帷子30反を献上している程であった。そのためか、三雲家を代表する聚楽堀川通り河西惣町中は文禄4年8月の聚楽第破却に際して秀吉の招きに応じて惣町中をあげて伏見に移り新市街地建設に参画している。この際に、聚楽町・東西朱雀町・上下神泉苑町などによる「聚楽組」が組織された。同時に、深草枯木町住の郷土兼庄屋の高田忠兵衛もまた新市街地建設工事を請負って、住吉町・榊屋町・条町・等安町などの「高田組」を組織して

いる。ついで、慶長18年(1613)高瀬川が開通すると、この新市街地西端から高瀬川迄の間に木材・薪炭の間屋町と船頭町ができ、三雲・高田と並んで惣年寄りであった坪井市右衛門の手によって「坪井組」が組織された。時に、慶長5年(1600)関が原の合戦を終えた徳川家康を同年9月21日山科の神無の森に出迎えた三雲九左衛門と高田忠兵衛、坪井市右衛門は、同日発行の徳川家康の朱印状(三雲家伝来文書)を貰い再出発の町作りに乗り出すことになる⁽⁶⁾。

いらい、三雲・高田・坪井の三家は伏見の惣町年寄りとして承認され、慶長7年(1602)伏見奉行柴山小兵衛、長田喜兵衛の時には、この3人の組頭の手によって伏見の町の運営がなされ、その結果、三雲・高田・坪井の三家は苗字帯刀が許され馬上ご免の待遇を得たと三雲家伝来の『高田・三雲家由緒書』は記している。そして同時に、後年の高田・三雲両家の兼務合体を伝えている。そのことから、この三雲家伝存の文書の中には、伏見三郷(石井・久米・船津)と山村関係関連の秀吉側近の地元有力武将(検地奉行)・御牧勘兵衛景則(?-1600)や高田家篤信の菩提寺(日蓮宗・宝塔寺)を信奉する日下部五郎八定好(1542-1616)や加藤左馬助嘉明(1563-1631)の書状も含まれている。さて、三雲家文書についての以上の知識を得ておいて、これから紹介する聚楽惣町中宛の前田民部卿法印玄以関係の禁制と共に検討してみる必要があるかと思う⁽⁷⁾。

2. 三雲家文書の中の禁制

三雲家に伝来する聚楽堀川通り河西惣町中に宛られたものは、4通ある。それを年代順に整理してみると、①は、天正17年(1589)2月15日付の前田玄以の覚書(29.9×46.8糎)であり、町内の夜番と火の用心は常々厳しく見張り、見ず知らずの者に宿を貸さないこと。何事によらず非合理なことを言い懸かける者あれば訴え出ること。また、ご法度に背く者があれば容赦なく訴え出ることなど、油断なく相守るべきことというものである。②は、ここで最も重要な意味をもつと思われる天正19年(1591)卯月28日付の聚楽町中宛民部卿法印(前田玄以)定書(31.1×46.4糎)である。内容は、原文に忠実に意識すれば、猫を決して盗み取ってはならないということ。また、猫が他所から離れ来たものであっても勝手に手元に捕らえて置いてはならないということ。さらに、猫を売買する者たち、売る者と買う者と共に厳しく罰せられるというもののなのである。③は、天正20年(1592、文禄元年)6月3日付の聚楽河西惣町中に宛られた民部法印(前田玄以、花押とも)定書(29.5×44.7糎)であり、釘隠し・折れ釘・引き手(襖の)・懸け金・瓦釘・鍔(かすがい)・嵌合(かんごう)・錠鍵など、またそれ以外にも、門扉や家屋に取付けた金物、鍬石(真鍬の別名)、赤銅、銅、鉄などを、古金(ふるかね)として売買することを厳重に禁止するという。またこれに違反する者があれば、売る者も買う者も共に処罰するというものである。④は、文禄2年(1593)11月晦日付聚楽河西(惣町中)宛の覚書(29.7糎×94.3糎)二帋紙継ぎ1通である。明らかに、市中の住民(農工商人)に宛られたもので、その内容には、①の場合と同様に洛中の聚楽堀川河西惣町宛に夜番は勿論のこと奉公人に宿貸しの際の請人と町奉行所への届け出を厳しく確認する。また、盗人・辻伐(斬り)・喧嘩口論など勝手気侷なことがら(風説)を禁じ、町内に商工農人以外の無職人の様子をも町奉行に届け出ることを義務付けた覚書なのである⁽⁸⁾。

『三雲家文書』中の禁制で特に問題となるのは、②の「猫不可盗取事」などに関する定(掟)書といえるであろう。既に、『猫のさうし』の冒頭で問題になっている慶長7年(1602)8月中旬に洛中の一条の辻に立てられた高札に至極類似した禁制が、既に、天正19年(1591)卯月28日にも出されていたのである。しかし、市古氏は前出の『(西洞院)時慶卿記』の慶長7年10月4日の条で『猫のさうし』冒頭の記述の出典の根拠となる箇所を指摘された。しかし、『猫のさうし』に記されている「洛中の猫を繋ぐ綱を解き、放ち飼い」にすることと「同猫の売買禁止」についての禁制が意味するものは、現実においては如何なるもの

であったのか。この『猫のさうし』では、いささか比喩的に愛猫家の秘蔵の名札付きの猫が解放感で飛び回り鼠を取る姿を描写してこの物語を始めている。しかし、本論では御伽草子の文学的梗概の機微に触れようとするものではない。改めて、私は市古氏が問題にされた『時慶卿記』4の東大史料編纂所写真帖(6173/19/19-4.p.63)慶長7年10月4日の条から検討を始めることにした。

それによると「4日、天晴(中略)1、猫不可繫旨、2、3ヶ月以前ヨリ被相触、仍或人御方へ行失、又犬嚙死丁多也ト」(読点筆者)とある。この御触書の真意は何処にあったのか。その謎を解く鍵は、この日記の筆者である西洞院時慶の近辺を洗うことから出発したのである。特に、三雲家文書禁制②の前田玄以民部卿法印定書の出された天正15年(1587)から文禄2年(1593)までの『時慶記』に焦点を絞ってみることにした⁽⁸⁾。先ず「猫子」と「鼠」に関するものを摘出してみる。天正15年(1587)4月29日の条「猫子御いま(時慶母の侍女)ヨリ給候」(p.31)、同年5月12日の条「大炊屋敷、小屋被畳処、鼠多狩取也」(p.34)、天正19年(1591)5月8日の条「猫子蓼蔵ヨリ到来」(p.120)、文禄2年(1593)正月24日の条「物置鼠ノ穴塞候、則獵候」(p.159)、同年6月19日の条「鼠狩申付候」(p.205)、同年8月19日の条「掃地下部ニ申付候、今晚鼠狩ヲ作、新大夫見廻ニ来候」(p.223)、同年8月24日の条「鼠狩候」(p.224)、同年12月15日の条「曲庵ヨリ猫ヲ被借候」(p.265)と、当時、鼠害対策に鼠の天敵である猫子の獲得に如何に苦慮したかが分かる。場合によっては「借猫」までもしたのである。それ程までに神経質に鼠害に苦慮するのは何故か。それは主食の穀物類が鼠に食い荒らされるという被害である。別に、『時慶記』には年貢米未進とその催促の記述があり、天正15年(1587)に2件、同19年(1591)に1件、また、文禄2年(1593)には紫竹村と花園村に4件ある。ついで、「借米」の記述は天正19年4月に2件、文禄2年(1593)には集中して多くみられる。特に年貢米未進に付いて、文禄2年17日の条で「百姓四郎左衛門、彦兵衛二人未進曲事ニ依」り奉行所方(松田勝右衛門)に訴えて入牢させた記述がある⁽¹⁰⁾。それらの背景には、各地に及ぶ厳しい度量衡の統制と検地にあるといえる。土地に対する農民の権利を単純化し中間搾取者を退け年貢率の一定化を推進した結果は、特に、農民への収奪が強化されていった。また、農民の抵抗力を殺ぐために刀狩りが強行されたのである。特に、文明6年(1474)7月の加賀一向一揆から明応8年(1499)にいたる山城・大和・河内・近江などにおける土一揆がある。これについて、農民から武器・武具を狩り取り上げる必要があったのである。

そこで、この室町期の山城・近江両国の地下農民に許された唯一の抵抗は、刈り取りを放棄するか、田畑を捨てて逃散する方法であった。また、半農半商の手段で古金具や古刀剣の再生産による新職業・鍛冶師職人が登場している⁽¹¹⁾。このことでも、三雲家文書③の定書で「古かね」の民間での再生産を促すような「売買事を堅く停止」することは「一揆」を停止する上で意味があったのではないか。

3. 前田玄以と西洞院時慶と御牧勘兵衛景則

ここで『時慶記』という日記の筆者である西洞院時慶(1552-1639)卿について説明しておきたい。これを時慶記研究会の序文を借りて説明するならば、西洞院家は桓武平氏を祖先とする堂上公家で成立は平安時代に遡り南北朝時代に居住地に因んで「西洞院」を家名にしたという。永禄9年(1566)以後に継嗣がなく家名は一時断絶していたが、天正3年(1575)4月に織田信長の公家復活政策により時慶が入って西洞院家を復活している。時慶は安居院僧正覚澄の子で、初め公虎を名乗り伯父飛鳥井雅春の猶子となって河鱈(かわばた)家を継いでいる。その後、西洞院家に入るに際して時通と改名し、右衛門督に上り、天正12年(1584)10月までに名を「時慶」と改めている。後陽成天皇に近侍し天正19年(1591)7月に従3位に叙され、慶長5年(1600)正月には参議、位階は正3位、同16年(1611)従2位に昇進している。寛永元年(1624)8月には出家し法名は円空、同16年(1639)巳卯12月20日享年88歳で没した⁽¹²⁾。

問題は時慶の天正15年から文禄2年までの間での交流関係の中で、この間、町奉行を務めた前田玄以(1540-1602)とその下で京都の諸事を奉行した松田勝右衛門政行(1554-1606)、特に年貢問題に関しては松田の世話になっている。また、交流のあった人物で注目すべき人物としては御牧勘兵衛景則(?~1600)がある。何れも『時慶記』には頻出する。特に、御牧勘兵衛景則は秀吉の馬廻り、所領は、山城御牧・田井村7百石、ついで、山城久世郡市田村千石を加増される(『四手井氏由緒書』)。景則は検地、作事奉行となって、主として山城で活躍している(『時慶記』)。慶長2年(1597)4月に自邸に招待供応した。慶長5年(1600)4月に没している。その間に時慶卿と交流のあったことは注目に値する。景則の子の助三郎信景は御牧家を継ぎ山城久世郡市田村千石を得ている。後に、勘兵衛と改め四手井清庵と号した。関ヶ原の役で失領している⁽¹³⁾。また、前田玄以(1540-1602)生国は美濃、初め比叡山の僧徒、後に織田信忠の臣で天正10年(1582)6月2日信忠が明智勢に二条城に囲まれた時に、信忠の子三法師(秀信)を託され清洲に逃れた。その後、織田信雄(1558-1630)から京都の奉行に任ぜられ、その俣、秀吉に仕えた。文禄3年(1593)春に伏見城の工事を分担している。慶長3年(1598)5奉行の一人となる。同五年の関ヶ原の役の戦後は所領安堵した。慶長7年(1602)壬寅5月7日64歳で病没している⁽¹⁴⁾。ところで、『時慶記』で前田玄以が民部法印として初登場するのは天正15年(1587)正月4日の条から頻出する。これは、時慶卿が後陽成天皇の近侍である以上、当然のことであろう。また、御牧勘兵衛(景則)が『時慶記』に登場するのは、現段階で活字化されている天正15年、同19年、文禄2年の記事の中では、天正19年(1591)4月1日、同月5、6両日の条の3件と6月29日の条に1件出ている。特に、同年4月1日の条では「祭主同心シテ民部法印へ行、酒アリ沈酔候、野口五兵衛・三狂(原文のママ、「牧」カ)勘兵衛御作事奉行候」とある。「御牧」を「三牧」としたと思われる。玄以邸での様子の記述であるが、ここで「野口五兵衛」とあるのは『戦国人名辞典』によると「野々口五兵衛」のことで、秀吉の馬廻、天正15年10月丹波桑田郡などの杣夫(そまふ)使役を命ぜられるとある。また、西洞院時慶卿の交友であったと記している。別に、同年4月5、6両日の条では、先ず5日の条で「3才(ママ、「牧」の略記号か)勘兵衛・野口五兵衛兩人振舞廻ニ呼候、午刻ヨリ及夕被帰候」とあり、翌6日の条では「内侍所御下行米一石請取候、則内侍所へ初ヲ(穂)一箱進納、老母へ一箱参候、(中略)五兵衛(野口)ヨリ預使者、又人ヲ遣候、勘兵へ(御牧景則)へモ人ヲ遣候」とある。要するに、時慶卿と前田玄以、御牧勘兵衛景則、野口五兵衛らにとって交流の接点は常にあったのである。

さて以上の様な時慶卿を巡る人間関係と検地と刀狩りを背景にみて、三雲家文書禁制を分析する必要があるかと思うのである。特に、重要な意味をもつと思われるのは、三雲家文書禁制②の「猫を盗み取ってはならない事」の前提条件は「例えその猫が他の所から離れて来るといふとも、その猫を捕らえて置いてはならない」ということでもある。別の言葉で表現すれば、他所から離れ来た猫を捕らえて綱で繋いで置くということは盗み捕るということと同じで許せないという理屈になる。もちろん、この貴重な鼠退治の唯一の武器(手段?)ともいえる猫を高値で売買する輩(やから)は、いわゆる「士農工商」の封建的秩序からみても許せないということにもなる。

秀吉は天正13年から没年の慶長3年にかけて各地で検地を行なっている。先ずこの検地に先立って度量衡、長さや面積の統一をはかっている。米穀を測る斛については京斛でもって全国共通のものとして年貢率を統一化した。石高は上・中・下田は各1石5斗・1石3斗・1石1斗とし、上畠・中畠・下畠は各1石2斗・1石・8斗・8斗とした。この石高は全て収穫高を示すものとなった。この時点で、土地台帳に記された斗代や石高は年貢高でもあった⁽¹⁵⁾。だから、これらの年貢高を集団で食い荒らす鼠は目の敵とされたことは当然の帰結であった。この意味で、人々の生活を脅かす鼠の集団を抑制する方法は、鼠の天敵である猫を武器(手段)とするしかなかったのである。そのためには、時慶卿といえども知人・親戚から「借猫」をせざるを得なかった。その時慶卿の慶長7年(1602)10月4日の日記に「猫不可繋旨2、3ヶ月

以前ヨリ被相触」と記されているのである。本論で紹介した三雲家文書禁制②の禁制はその時点では日記に書かれていなくても、当時の彼を取り囲む周辺の知人たちから推察して、この禁制の内容は当然に知らない筈はなかったのである。

4. 中世小説『猫のさうし』と『時慶記』の禁制の理解度

本論の冒頭でも触れたことであるけれども、『猫のさうし』で紹介している慶長7年8月中旬の町奉行所からの高札の一文には「京の町中の飼い猫の綱を解き放ち飼いにすることと、同時に飼い猫の売買を禁止する」ことの厳重なお触れで以て始めている。しかし、これでは奉行所の施政方針の意図が少しく説明不足の様な気がする。ところで、『古事類苑』動物部三所収(p.212)では『毛利家文書』第147、慶長13年5月13日の条の「他人の猫離れたるをつなぎ候ふ儀、一切停止之事」とあるのを掲載している。確かに、桑原博史氏はこれについて「先の法令(慶長七年の)との関係は分からないが…」と前提にされながら「猫の綱を解いて放ち飼いにする」ことの説明不足を補っておられる。「面々秘蔵せし猫どもに札を付けて放ち申せば…」の本文の一節には、御伽草子製作者の作為が見え隠れするけれども、この点を補えば三雲家文書②の猫の禁制の文面に少しばかり近付いてくるのである。要するに、他人の飼い猫が離れ来るのを繋ぎ留めることを禁じているのなら理解できる。しかも、この草子の製作者はそんなことを承知の上で書いていることに小説の面白味があるのではないか。確かに『猫のさうし』の本文の冒頭では「慶長7年8月中旬」と明記して一条の辻に立てられた高札の文面を紹介することで書き始められている。このことからこの草子の成立期はそれ以降には違いないが、その小説の内容がそれ以前のこの種の禁制と全く無関係に創作されたとは到底考えられない。しかも、その同時代(慶長7年)に生きておられたのは西洞院時慶卿なのであり、また、彼の日記が記していることでもあったのである。

脚注

- (1) 松本隆信校注『御伽草子集』(新潮日本古典集成、平成7年1月30日第五刷、(株)新潮社発行)所収「解説」による「(前略)今日最も普遍的に使われているのは、市古貞次氏が『中世小説の研究』および『御伽草子』(日本古典文学大系)において示された、公家物・僧侶物(宗教物)・武家物・庶民物・異国物・異類物の6分類であろう。(下略)」372頁参照。
- (2) 岩波文庫本、市古貞次校注『御伽草子』(下)所収「猫のさうし」による。同書略注232～233頁参照。別に、講談社学術文庫本、桑原博史全訳注『おとぎ草子』所収「猫の草子―京に鼠がいなくなったわけ」参照。
- (3) 徳田和夫編『お伽草子事典』(東京堂出版、2003年2月20日再版)379頁参照。
- (4) 大阪市立博物館『研究紀要』第4冊、昭和47年3月発行、所収、拙論「三雲家文書について」13～39頁参照。
- (5) 愛知大学文学部史学科『愛大史学―日本史・アジア史・地理学』第7号(平成10年3月15日発行)所収、拙論「『三雲家文書』の禁制について」19～56頁参照。
- (6) 前掲、大阪市立博物館『研究紀要』第4冊、13～14頁参照。『京都の歴史』4、「桃山の開花」(学芸書林、昭和44年10月10日発行)第3章所収、「伏見の城下町」339～349頁参照。
- (7) 前掲大阪市立博物館『研究紀要』第4冊所収、「三雲家文書」16～32頁参照。
- (8) 本論掲載写真史料、三雲家文書禁制①～④参照。
- (9)(10) 時慶記研究会編『時慶記』第1巻、平成13年12月20日初版、本願寺出版社発行。第1巻には天理大学附属図書館自筆本の「天正15年」、他は宗教法人本願寺所蔵自筆本「天正19年(正月～9月)」と「文禄2年」によった。以下、本文における引用頁数は同書によっている。
- (11) 奈良県立商科大学『研究季報』開学記念号(平成2年12月発行)所収、拙論「近江堅田・本福寺門徒団の経済的側

面」160～161頁参照。

- (12) 前掲時慶記研究会編『時慶記』第1巻、所収の時慶記研究会序文参照。坂本武雄編・坂本清和補訂『改定増補・公卿辞典』（国書刊行会、昭和52年6月30日第二刷発行）44頁、157～158頁参照。
- (13) 高柳光壽・松平年一著『増訂版・戦国人名辞典』（吉川弘文館、昭和48年7月20日発行）「御牧景則・回信景」の項、240～241頁参照。
- (14) 前掲高柳光壽・松平年一著『増訂版・戦国人名辞典』（吉川弘文館、昭和48年7月20日発行）所収「前田玄以」の項、224～225頁参照。別に、斎木一馬・岩沢悪彦校訂『断家譜』第2巻（株式会社群書類従完成会、昭和51年11月15日第二刷発行）210～211頁参照。
- (15) 前掲書『京都の歴史』4、「桃山の開花」（学芸書林、昭和44年10月10日発行）第3章所収、「太閤検地」278～279頁参照。

主要参考文献

市古貞次著『中世小説の研究』（東京大学出版会、昭和30年発行）『京都教育大学紀要』（Ser.A.No.35.1969発行）所収、野田只夫論文「伏見城下町の一考察」

三雲家所蔵『高田・三雲家由緒書』

市古貞次校注『御伽草子』日本古典文学大系38、（昭和38年、岩波書店発行）

『古事類苑』動物部三、獸三、（平成11年5月20日、吉川弘文館発行）

国史大辞典編集委員会編『國史大辭典』第1～15巻（昭和54年3月1日～平成54年3月1日、吉川弘文館発行）

備考：今回、本論文で猫に関する禁制を取り上げたことで、人間生活に及ぼす「鼠害」についての一考を蛇足しておきたい。少なくとも「鼠害」については、私にとっては過去の経験の中で強烈に網膜に焼き付けられたものがある。時には、金網で作られた鼠取りの籠、または、毒饅頭で「鼠狩り」をした経験。天井裏で猫と鼠の走り回る激しい音、時には逃げ回る鼠を追い掛ける青大将（蛇）の不気味な鱗のきしむ連続音などを夜布団の中で寝ながら耳にした経験。もう実に遠い昔の思い出となってしまった。何故なのか、その後は余り聞かない。その理由は残念ながら私には分からない。しかし、「石見銀山」が単純な石見の銀山（島根県大田市にある銀山）の名というよりは、「猫いらず」の異名をもつ猛毒（石見銀山産出の砒石で製した殺鼠剤）であったことも私は知っている。実際、明治38年（1905）には「猫いらず」の商品名で市販された殺鼠剤でもあったのである。しかし、歴史の上で北条時頼（1227～63）が弘長三年（1263）11月22日戌刻、最明寺北亭で37歳で没した時。足利直義（1306～52）が文和元年（1352）2月26日鎌倉で47歳で没した時。毛利隆元（1523～63）が永禄6年（1563）防府から出雲攻略中の毛利陣営へ転戦中、安芸国佐々部（高田郡高宮町）で部将・和知誠春の宿所で饗応を受けた直後の同年8月4日に41歳で急死している。これらは、何れも毒殺の風説をもっている中世動乱期の出来事である。中世においては、猫にかわる殺鼠剤は時に毒殺という殺人行為を招くことにもなったと考えられる。

三雲家文書禁制①
 前田玄以聚楽町宛覺書
 天正十七年(1589)二月十五日付

一 此書は
 一 本用紙
 一 本紙部
 一 此書は
 一 此書は
 一 此書は
 一 此書は
 一 此書は
 一 此書は

三	三
一 訂	一 訂
一 訂	一 訂
一 訂	一 訂
一 訂	一 訂

天正廿六年六月三日付
 聚樂河宛定書
 民部法印(花押)
 三雲家文書禁制③

